

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	加藤 一郎
論文題目	古墳時代の器物生産と倭王権—埴輪,倭鏡,その他の副葬品の分析から—
<b>審査要旨</b> <p>本論文は、古墳時代における器物生産(埴輪、倭鏡、その他の副葬品)に注目し、その生産の画期を通時的に分析する作業を通じて、倭王権の動態を考古学的に位置づけることを目的とする。古墳時代の倭国中枢部においては、多様な原材料をもとにして様々な器物が生産されたが、本論では粘土を材料とする埴輪、青銅製品である倭鏡、鉄製甲冑といった異なる原材料の器物を考古学的に分析し、複数器物の生産を把握する作業によって、倭王権の中枢部の動態を把握することを試みた。特に、陵墓から出土した埴輪の同工品分析や、研究があまり進んでこなかった後期倭鏡の分析など、宮内庁書陵部での職務経験を活かした遺物の詳細な研究は、今後の古墳時代研究に大きな影響を与える成果だと考える。</p> <p>以下、各部の成果について整理し、最後に本論の学術的価値についてまとめる。</p> <b>序章（本論文の目的と方法）</b> <p>本章では、論文の基本的枠組みとなる埴輪編年について、大別5期、細別10期の編年案を提示した。上石津ミサンザイ古墳の出現を中期の画期とし、古式群集墳の出現(TK23～47段階)をもって後期とみる古墳時代の年代観を示した。相対的に中期の年代幅が狭くなるが、古墳時代前期～後期への過渡的な段階として中期を位置付ける古墳時代観を反映した年代提示といえる。</p> <b>第1部（埴輪生産と倭王権）</b> <p>第1部では、倭王権中枢部における埴輪生産の動態を分析した。前期、中期、後期の各時期の分析事例を提示しているが、特に中期の陵墓出土埴輪の同工品分析の成果が特筆される。</p> <p>中期の事例としては、コナベ古墳、百舌鳥御廟山古墳、大山古墳、土師ニサンザイ古墳から出土した円筒埴輪を中心とした同工品分析の成果を提示した。その結果、Ⅲ期において倭王権における身分的・社会的序列を円筒埴輪で明示する体制が成立し、Ⅳ期にその特徴が引き継がれる点を指摘した。従来の研究では、古墳時代中期の「倭の五王」の時代に該当するⅢ～Ⅳ期は、倭王権の安定した発展段階の時期と把握されていたが、大型墳と陪冢の関係に見られるように不安定な時期であった点を論じた。また、倭王権中枢部における埴輪生産の画期を、Ⅴ期新相と結論づけた。</p> <b>第2部（倭鏡生産と倭王権）</b> <p>第2部では、前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡について、それぞれの生産の動態を分析した。</p> <p>前期倭鏡については、中段階の対置式神獣鏡A系、新段階の分離式神獣鏡系を分析した。結果として、舶載斜縁神獣鏡系によって新しい系列が中段階に出現し、中期倭鏡へ発展する点を指摘した。</p> <p>中期倭鏡については、獣像鏡や神獣鏡が主体となるが、倭鏡生産としては最も生産が縮小した時期である点を指摘した。縮小傾向にあった中期倭鏡の段階から、倭王武の時代における同型鏡の流入によって、後期倭鏡の生産は再び活性化することになる。</p> <p>後期倭鏡の段階では、面径によって身分的な序列を示す配布方法が復古的に採用されたが、その授受の在り方に関しては、前期倭鏡との質的な違いがある点も指摘した。同型鏡の流入によって活性化した後期倭鏡の生産も、埴輪編年Ⅴ期中相(TK10段階)に終了するが、その画期が埴輪生産の画期と連動する点を論じた点が非常に重要な成果である。</p>	

### 第3部（その他の副葬品生産と倭王権）

第3部では、その他の副葬品として、銅鏃・革盾・甲冑・鈴釧の分析事例を示した。第3部における器物生産の分析の論点は多岐にわたるが、埴輪・鏡とは異なる原材料を用いた器物生産の動態を把握した点が特筆される。

### 第4部（器物生産からみた古墳時代の倭王権と社会）

第1～3部の器物生産、具体的には埴輪、倭鏡、その他の副葬品の分析を踏まえた上で、第4部では倭王権の動態の画期について整理した。具体的には、①古墳時代開始期、②古墳時代前期後半、③古墳時代中期、④古墳時代後期前葉(TK23～47 段階、雄略朝)、⑤古墳時代後期中葉(TK10 段階、欽明朝)の5つの画期を指摘した。特に、④⑤の画期について重視する姿勢を示した。

雄略朝においては、V群系埴輪の成立、須恵器生産の全国的な波及、同型鏡群流入による後期倭鏡の復古的活性化など、前後の時期に比べて顕著な特徴がある点を指摘する。一方で、前方後円墳自体の縮小傾向を確認し、最も大きな画期であるとは認識していない。最も重要な変革期は、TK10 段階頃の日置荘西町系埴輪の展開や後期倭鏡の終焉段階、すなわち欽明朝と把握する。この時期の倭国における祖先崇拝の意識変化を遺物で指摘しつつ、人制・氏姓制・部民制の成立といった制度面の変化とも器物生産の画期が連動する可能性を指摘した点は重要である。

最終的な結論としては、日本列島を覆う国家が成立した段階を、古墳時代後期中葉頃、すなわち TK10 段階の欽明朝と位置付けた。この時期は、古墳時代前期から続く器物の配布構造が大きく変化し、特定の中央氏族が生産・流通に関与したとされる装飾付大刀、あるいは馬具や金銅製品の生産の再編成など部民制の施行と連動する点を指摘した。また、6世紀前半における東西の反乱を契機として成立した国造制やミヤケ制など、列島規模の構造変化が、律令国家体制へ向けた前段階にあたる点を論じた意義は大きい。

本論は、倭王権中枢部の埴輪と倭鏡、その他の副葬品という様々な器物の生産に着目し、その画期を考古学的に論じた点が最も重要な成果である。その中でも、陵墓から出土した一括埴輪資料の同工品分析や、同型鏡の流入で活性化した後期倭鏡の分析とその歴史的な位置づけなど、中期～後期前半にかけての圧倒的な資料数を誇る考古遺物を緻密に、そして丹念に分析した点は今後の考古学の遺物研究にも大きな影響を与える成果といえる。また、純粋に考古学的な遺物分析から導き出した画期を、文献史学も視野に入れた「国家成立過程」の中で把握した点も特筆できる。

以上の理由から、本論文は博士学位授与にふさわしい論文であると判断する。

公開審査会開催日	2019年 1月 23日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	城倉 正祥	東アジア考古学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	寺崎 秀一郎	中南米考古学	
審査委員	明治大学文学部・准教授	若狭 徹	日本考古学	博士(明治大学)
審査委員	京都大学大学院文学研究科・准教授	下垣 仁志	考古学	博士(京都大学)
審査委員				